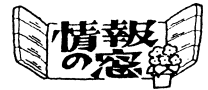


国際会議 ICCOPT 2016 Tokyo開催の経験と教訓 (5)

—プロポーザル作成・会計・アルバイト担当—



福田 光浩, 山下 真, 水谷 友彦 (東京工業大学)

1. プロポーザル作成 (福田 光浩)

1.1 ICCOPT 招致における留意点

第1回 ICCOPTは2004年 Troy市 (アメリカ) で開催され、以降3年ごとに2007年にHamilton市 (カナダ)、2010年にSantiago市 (チリ)、2013年にAlmada市 (ポルトガル) にて順次行われた。東京での開催はちょうど5回目にあたったが、第3回のSantiagoを除いては、発表件数、参加者数は第1回 (発表件数約120件) から着実に増加して、今回はポスター発表を含めると529件の発表件数に達した¹。

第5回 ICCOPTの開催決定プロセスは、遡ること2013年5月中旬、次期開催地を決定するにあたり、Mathematical Optimization Society (MOS) の ICCOPT運営委員長Jong-Shi Pang先生から直近の開催地を考慮し、2016年は特に、環太平洋地域で開催したい意向から水野真治先生 (東工大) に直接声がかかり、同じ大学の有志にも招集がかかった。

そこから急遽、プロポーザルの作成が始まったが、幸い、水野先生が骨組を示してくださり、私を含め、中田和秀先生、山下真先生、北原知就先生に協力していただいて、以下のような情報を手分けして収集し、2週間未満で原案を作成した。なお、プロポーザルの文面は私が担当し、予算は山下真先生が担当されたことを記しておく²。

プロポーザルを作成するにあたり、要求されていた条件も含め、以下のことをなるべく正確に調べ、予測する必要がある。1. 会議を開催する期間と会場；2. 会場の会議室 (講義室) 数、プレナリー講演、セミプレナリー講演を行う会議室の収容人数；3. 参加者の予測数；4. 会場周辺の宿泊費、および会場へのアクセス；5. 会議登録費の値段；などであった。

また、ICCOPT特有の事情として1. 連続最適化の研究者が多数いること；2. 学生用の安価な宿泊施設の確保；3. 学生論文賞を設置し、その賞金なども用意する；などが挙げられる。

さらに、運営と招致に関しては、1. 1988年に開催されたISMPの組織委員が今回の実行委員・組織委員に加わっている；2. RAMPの運営などで長年培った会議運営ノウハウを共有している；3. 企業からの寄付金などがある程度期待できる；4. 来日するためのビザの必要性；5. 空港からのアクセス；6. 宿泊費、食事代の相場、インフラ、治安、観光地の有無；などの点を招致プロポーザルでアピールした。

その後、プロポーザルのメスの2013年6月中旬までに、微修正をして正式なプロポーザルと会議運営予算を提出した。

このプロポーザルを作成する過程で一つ学習させてもらったこととして、北米で行われる学術会議と違い、東京のようにホテルの宿泊客の需要に困らない地域では、まず一大学の教員では、国際会議を開催するからといってホテルの宿泊部屋を会議用にブロック予約することや割引の交渉はできないということであった。

プロポーザルを提出した1カ月後にICCOPT運営委員長Jong-Shi Pang先生からはさらに以下の情報の詳細が求められた。1. プレナリー講演を行う会場が溢れた場合のサテライト会場への中継；2. ホテルの宿泊費が想定額より若干高めである指摘；3. 1988年のISMPのディナーでの「事件」の記憶がまだ残っていて、同じようなことが起こらないという確認；4. プレナリー講演、セミプレナリー講演の招待講演者への謝金の範囲があまりはっきりしていなかったこと；などがあったが、幸いそれらに関しては納得いくように回答ができ、2013年7月下旬、ポルトガルで開催されたICCOPTで3年後の開催地が東京であることが発表された。ちなみに、その後から知った情報として、ほかに二つの候補地があったような。

¹ 後藤順哉先生の本連載 (2) 「プログラム作成の舞台裏」を参照。

² 詳細については2節の山下真先生の記事を参照されたい。

1.2 会議を振り返って

実際、会議が終わってから振り返ってみれば、プロポーザルに書かれていたことはおおむね実行されたものの、参加者の増加やホテルの割引交渉破綻などで余儀なく変更せざるを得なかったこともあり、結局は柔軟な対応が一番重要であったことがわかった。

東京で会議が開催されることが決定してからわかったこととして、開催地によっては国際会議招致のためのサポート団体や助成金などが存在することがある。東京の場合は公益財団法人東京観光財団があり、事前に用意をしていれば、金銭的なサポートが得られたかもしれない。ちなみに、ICCOPTで配布したバッグのなかに入っていた東京の観光案内マップとガイドブックは東京観光財団から無償で提供していただいたもので、ここで感謝の意を述べておきたい。

個人的には、次のような反省がある。ICCOPTが発足されたのは、大学院生の育成を主な目的の一つとした連続最適化の会議を開催するためであり、学生向けのサマースクールや学生論文賞の設立もそのためであった。しかし、自身の研究室の学生はほとんどアルバイトの業務に従事してしまい、会議開催前に学生にサマースクールや会議の発表を最初から最後まで聞くように論しておくべきだったと今更ながら後悔している。

余談ではあるが、会議のグッズ（カバン、ノート、ペンなど）の一部も私が用意させていただいた。商品の選定、発注、納品などのスケジュールには余裕があって、おおむね順調であったが、業者によっては最後の最後まで油断ができない場合があるので、業者の選定にはくれぐれも実績と評判を事前に確認しておいたほうがよいと思った。また、名札の整理と確認作業をしているとき、知り合いの海外の研究者から「なぜ、秘書の仕事をあなたがしているの?」と言われた。昨今の日本の大学を取り巻く教育・研究環境はこんなものになったのねと思わされる一幕であった。

2. 会計（山下 真）

ここでは、ICCOPTの会計担当の一人としての立場から、思いつくままに時系列に沿って記してみます。会計担当のお仕事は、開催場所として立候補することが決まったところからスタートしました。これは、MOSの開催場所として選ばれるためのプロポーザル提出に予算計画も準備をしたためです。予算計画を立案する過程で難しいのは、全体の参加者数および構成比率（MOSメンバーかどうか、学生かどうかなど）を予

測することです。この予測にあたっては、OPTIMA 71に掲載されていたISMP2003のデータが大変参考になりました。しかしながら、参加者数予測に基づいて収支バランスを初めて計算した時点では、全体参加者数を少なめに見積もったこともあってか、数百万円に及ぶ赤字となりました。ご寄附や補助のお願いをするにしても、まずは緊縮財政で臨むことになりました。

その後、リスボンで開催されたICCOPT 2013でICCOPT 2016が東京で開催されることがアナウンスされました。折しも、2020年のオリンピックが東京に決まったニュースが大々的に報道されていたこともあって、ここから準備が本格的に始まるんだなあ、と思ったことを今でもはっきり覚えています。

それから2年間では、主にご寄附の書類などに関する作業を担当しました。ご寄附については、実際の支出が立て込む前にご寄附を頂戴できたことはICCOPT 2016開催までの全期間で安定した会計状況を保つことができた大きな要因であったと考えています。ご寄附や補助をしていただいた皆様には、会計担当としての立場からお礼申し上げます。

2016年に入り、参加者登録のウェブシステムが実稼働に入るところになると、参加者配布用のグッズ購入が進み、実際の支出が本格的に始まるようになりました。ちなみに、このころは、「予算計算を大きく間違っていて、このままでは大赤字だ!」というような夢を見るたびに夜中に飛び起きたりしていました。

そのような夢も、Early Registrationの人数がわかった後は見なくて済むようになりました。2013年の立候補時点の予測よりも参加者が多くなるのがわかり、ご寄附を合わせると大幅な赤字とならないという見通しが立ちました。この数字をExcelで確認できたときは、肩の荷がグッと下りる気分でした。なお、ICCOPT 2016の参加費はドル建てではなく円建てで行いました。2013年から2016年の準備期間では為替変動が20%程度上下しており、ICCOPT 2016の規模では収支に数百万円の影響が出ます。ICCOPT 2016では、円建てで参加費を扱った副効果として、為替に対するリスクヘッジとしての恩恵が得られました。

Early Registrationが終わると、支出頻度が非常に高くなり、それに伴って、それぞれの使用用途にどの程度まで金額を割り当てられるか、ということ判断する必要がありました。そのために、予算の金額を覚えておくと同時に、支出パターンをいくつかシミュレーションしておくことで、予算割り当て変更などに

タイムリーに対応できるように心がけておきました。

慌ただしく準備が進んでいくと、あっという間に2016年8月6日の開催当日となりました。2016年8月11日までの開催期間中は、消耗品購入による領収書の集計などがメインでした。開催期間中は、会計担当のお仕事よりも、ほかのお仕事を補佐することが多かったように思います。

さて、2016年8月11日でICCOPT 2016の開催は無事に終わりました。これで会計のお仕事も終わり、と思いきや、むしろ会計の戦いはこれからです。アルバイトのみなさんの給与やバンケット、アブストラクト集印刷など支払いが続きました。この結果、8月後半には数百枚の書類が手元に積み上がり、これらすべてをほかのデータとダブルチェックし、銀行口座との整合性を確認する作業が連日続きました。この作業には時間がかかりましたが、1円のずれもなく整合していることが確認できました。

なお、会計作業全般については、オペレーションズ・リサーチ学会事務局のみなさまに大変お世話になりました。会計に関する幅広い知識などを含め、事務局のサポートがなかったら、ICCOPT 2016がここまでスムーズに開催できたとは思えません。

と、ここまで時系列に沿って、つらつらと思い出したことを書いてきました。ICCOPT 2016には会計担当として3年半にわたって携わりました。会計はお金に関わるということで国際会議開催の多彩な面に携わることができ、ほかの機会では得られなかったような貴重な経験を得ることができました。今回経験できたことは、今後の自分の仕事にも大きな糧となっていくであろう、と思っています。ICCOPT 2016では実行委員会メンバーを含め、多くの方にお世話になりました。

最後とはなりますが、ISMP2003のデータが役に立ったように、今後の参考になるかと思しますので、参加者数の要約を表にして記しておきます。

	人数
MOS or ORSJ Members (Early)	224
Non above Members (Early)	218
Students/Retirees (Early)	158
MOS or ORSJ Members (Late)	12
Non above Members (Late)	28
Students/Retirees (Late)	9
参加登録人数	649
Lecturer/Plenary/Semi Plenary	16
その他	5
総参加者数	670

3. アルバイト担当 (水谷 友彦)

私は東工大の中田先生と広報を担当していましたが、ひょんなことからアルバイトの取りまとめを引き受けることになりました。時期は2016年の2月で、ICCOPT実行委員会のときでした。会議の中でのお話ですと仕事内容はICCOPT開催のために必要なアルバイトを確保するというものだったと記憶しています(実際はそれに加えて受付や会場の準備などさまざまな仕事に携わるようになっていきました)。

ICCOPT開催のために必要な業務の洗い出しを行う中で、アルバイトの方をお願いする業務内容は多岐にわたることがわかってきました。当初会場は2カ所で、サマースクールはNYC、本会議はGRIPSを利用するというものでした。ところが研究発表の申込み件数が当初の見込みよりも多くなったということで、本会議はGRIPSに加えて国立新美術館の会議室と講堂も利用することになりました。結局、使用する会場は2カ所から3カ所に増加しました。また、海外からの参加者、特に学生の方に向けてNYCの宿泊施設を安い価格で提供できるようにしました。NYCはホテルではありません。そのため会議参加者に対するフロント業務もアルバイトの方をお願いすることになりました。サマースクールと本会議における受付や会場に関する業務、加えてレセプションやバンケットに関する業務、おまけにNYC宿泊施設のフロント業務とアルバイトの方をお願いする必要がある業務の種類は多くなりました。もちろんNYC、GRIPS、国立新美術館における設備は異なります。そのため業務内容も会場ごとに異なることになります。会場は3カ所で、業務も多岐にわたりますので、アルバイトは最低でも70名から80名、できれば100名程度確保したいと思っていました。

5月の連休明けからアルバイトの募集を始めました。最初の1週間における応募者は10名にも届かなかったかと記憶しています(5名以下だったような気がします)。そのときはアルバイトを70名も集めることは不可能だろうと思っていました。その後、電通大の岡本先生、理科大の奥野先生から「最適化の基盤とフロンティア未来を担う若手研究者の集い」においてアルバイト募集の宣伝をさせていただく機会をいただきました。ご存知のとおりこの研究集会では最適化に興味をもっている修士課程、博士課程の学生がたくさん参加します。宣伝の効果もありその後はアルバイトの

応募件数も増加し、最終的には63名の学生をアルバイトとして雇用することができました。この63名は七つの大学の学部3年生から博士課程までの学生の方です。この人数に加えて研究室で事務に携わっている3名の方とJTBから受付業務に詳しい方を1名派遣していただきました。その結果、合計67名を確保することができました。業務量を考えると雇用した人数は多少少ないですが、募集開始時のことを思うとこれだけの人数が集まったことにほっとしました。

アルバイトの業務内容とその実施方法はあらかじめ電通大の村松先生を中心とする小委員会で検討し、それをまとめた冊子を作成しました。懸命に準備作業を行いました。いくつかの事柄に関しては準備が不完全なままICCOPT開催初日を迎えることになりました。開催日の直前に村松先生と電話で受付や会場業務に関して打ち合わせを行ったことをよく覚えています。

アルバイトの方たちは本当によく働いてくれました。感謝しています。その活躍の様子的一端を紹介したいと思います。受付業務の実施方法はあらかじめ小委員会で決めましたが、実際の業務の様子を見てアルバイトの方たちがいろいろと改善を施してくれました。また、英語でのコミュニケーションに関しても問題なくこなしていました。

NYCフロント業務を担当された方には本来の業務以外のこともお願いすることになってしまいましたが、文句も言わずに懸命に業務をこなしてくれました。サマースクールはNYCの講堂で開催しました。その受付に関する荷物（参加者への配布物やポスターなど）は

講堂から離れた別の場所に保管することになりました。したがって、サマースクールの講義開始時刻の前までに荷物を講堂まで移動させる必要があります。その移動もNYCフロント業務担当の方にお願しました。本来の業務はNYCに到着した宿泊者に対して鍵などを渡すというもので、業務時間は夕方から夜にかけての長時間、場所も暑い屋外と大変体力がいる業務です。この業務に加えて早朝からの荷物の移動も手伝っていただきました。

研究発表の会場補佐業務に関しては事前準備の不足からいくつかトラブルが散見されましたが、全体的にはうまくいったと思っています。アルバイトの雇用人数は全体の業務量を考えると不足気味で、またICCOPTが開催されてから新たな業務が生まれ、それにアルバイトを割り当てる必要に迫られました。その結果、会場補佐業務に割り当てることができるアルバイトの人数は少なくなってしまいました。研究発表の際のプロジェクターやノートパソコンに関するトラブルへの対応に手間取ることがありましたが、少ない人数のなか精一杯の対応だったと思います。事前にいくつかの講義室には備え付けのノートパソコンがないことがわかっていました。それに対してあらかじめノートパソコンを準備しておけばいくつかのトラブルは事前に防げたかもしれません。その点私の準備不足で反省しています。

繰り返しになりますが、ICCOPT開催を縁の下から支えてくれたアルバイトのみなさん、どうもありがとうございました。暑い中お疲れ様でした。